

## 第二十二章 予期せぬ課題

「ポッター！ ウィーズリー！ こちらに注目なさい！」

木曜の「変身術」のクラスで、マクゴナガル先生のイライラした声が、

鞭のようにビシッと教室中に響いた。

ハリーとロンが飛び上がって先生のほうを見た。

授業も終わろうとしていた。生徒はもう課題をやり終えていた。

ホロホロ鳥から変身させたモルモットは、マクゴナガル先生の机の上に置かれた大きな籠に閉じ込められていた（ネビルのモルモットはまだ羽が生えていたが）。

黒板に書かれた宿題も写し終わっていた

（「変身呪文」は「異種間取替え」を行う場合、どのように調整しなければならないか、例を挙げて説明せよ）。終業のベルがいまにも鳴ろうというときだ。

ハリーとロンは、フレッド、ジョージの「だまし杖」を二本持って、教室の後ろのほうでちゃんばらをやっていた。

ロンはブリキのオウムを手に、ハリーはゴムの鱈を持ったまま、驚いて先生を見上げた。

「さあ、ポッターもウィーズリーも、歳相応な振舞いをしていただきたいものです」マクゴナガル先生は、二人組を恐い目で睨んだ。

ちょうど、ハリーの鱈の頭がだらりと垂れ下がり、音もなく床に落ちたところだった。

一撃前にロンのオウムの嘴が、頭を切り落としたのだ。

「皆さんにお話があります。

クリスマス ダンスパーティが近づきました。

三大魔法学校対抗試合の伝統でもあり、外国からのお客様と知り合う機会でもありま

## Chapter 22

### The Unexpected Task

“Potter! Weasley! *Will you pay attention?*”

Professor McGonagall’s irritated voice cracked like a whip through the Transfiguration class on Thursday, and Harry and Ron both jumped and looked up.

It was the end of the lesson; they had finished their work; the guinea fowl they had been changing into guinea pigs had been shut away in a large cage on Professor McGonagall’s desk (Neville’s still had feathers); they had copied down their homework from the blackboard (“*Describe, with examples, the ways in which Transforming Spells must be adapted when performing Cross-Species Switches*”). The bell was due to ring at any moment, and Harry and Ron, who had been having a sword fight with a couple of Fred and George’s fake wands at the back of the class, looked up, Ron holding a tin parrot and Harry, a rubber haddock.

“Now that Potter and Weasley have been kind enough to act their age,” said Professor McGonagall, with an angry look at the pair of them as the head of Harry’s haddock drooped and fell silently to the floor — Ron’s parrot’s beak had severed it moments before — “I have something to say to you all.

す。

さて、ダンスパーティは四年生以上が参加を許されます。下級生を招待することは可能ですが」

ラベンダー ブラウンが甲高い声でクックッとして笑った。

バーバティ バナルは自分もクスクス笑いたいのを顔を歪めて必死でこらえながら、ラベンダーの脇腹を小突いた。二人ともハリーを振り返った。

マクゴナガル先生が二人を無視したので、ハリーは絶対不公平だと思った。

ハリーとロンのことはいま叱ったばかりなのに。

「パーティ用のドレスローブを着用なさい」

マクゴナガル先生の話が続いた。

「ダンスパーティは、大広間で、クリスマスの夜八時から始まり、夜中の十二時に終わります。ところで」

マクゴナガル先生はことさらに念を入れて、クラス全員を見回した。

「クリスマス ダンスパーティは私たち全員にとって、もちろん、コホン、髪を解き放ち、羽目を外すチャンスです」

しぶしぶ認めるという声だ。

ラベンダーのクスクス笑いがさらに激しくなり、手で口を押さえて笑い声を押し殺していた。

今度はハリーにも、何がおかしいのかわかった。

マクゴナガル先生の髪はきっちりした髷に結い上げてあり、どんなときでも髪を解き放ったことなど一度もないように見えた。

「しかし、だからと言って」先生はあとを続けた。

「決してホグワーツの生徒に期待される行動基準を縮めるわけではありません。

グリフィンボール生が、どんな形にせよ、学校に屈辱を与えるようなことがあれば、

“The Yule Ball is approaching — a traditional part of the Tri-wizard Tournament and an opportunity for us to socialize with our foreign guests. Now, the ball will be open only to fourth years and above — although you may invite a younger student if you wish —”

Lavender Brown let out a shrill giggle. Parvati Patil nudged her hard in the ribs, her face working furiously as she too fought not to giggle. They both looked around at Harry. Professor McGonagall ignored them, which Harry thought was distinctly unfair, as she had just told off him and Ron.

“Dress robes will be worn,” Professor McGonagall continued, “and the ball will start at eight o’clock on Christmas Day, finishing at midnight in the Great Hall. Now then —”

Professor McGonagall stared deliberately around the class.

“The Yule Ball is of course a chance for us all to — er — let our hair down,” she said, in a disapproving voice.

Lavender giggled harder than ever, with her hand pressed hard against her mouth to stifle the sound. Harry could see what was funny this time: Professor McGonagall, with her hair in a tight bun, looked as though she had never let her hair down in any sense.

“But that does NOT mean,” Professor McGonagall went on, “that we will be relaxing

私としては大変遺憾に思います」

ベルが鳴った。

みんながカバンに教材を詰め込んだり、肩にかけたり、いつもの慌ただしいガヤガヤが始まった。

その騒音を凌ぐ声で、マクゴナガル先生が呼びかけた。

「ポッター、ちょっと話があります」

頭をちょん切られたゴムの鱈と関係があるのだろうと、ハリーは暗い気持ちで先生の机の前に進んだ。

マクゴナガル先生は、ほかの生徒が全員いなくなるまで待って、こう言った。

「ポッター、代表選手とそのパートナーは」

「なんのパートナーですか？」ハリーが聞いた。

マクゴナガル先生は、ハリーが冗談を言っているのではないかと疑うような目つきをした。

「ポッター、クリスマス ダンスパーティの代表選手たちのお相手のことです」

先生は冷たく言い放った。

「あなたたちのダンスのお相手です」

ハリーは内臓が丸まって萎びるような気がした。

「ダンスのパートナー？」

ハリーは赤くなるのを感じた。

「僕、ダンスしません」と急いで言った。

「いいえ、するのです」

マクゴナガル先生はイライラ声になった。

「はっきり言っておきます。

伝統に従い、代表選手とそのパートナーが、ダンスパーティの最初に踊るのです」

突然ハリーの頭の中に、シルクハットに燕尾服の自分の姿が浮かんだ。

ペチュニアおばさんがバーノンおじさんの仕事のパーティでいつも着るような、ヒラヒラしたドレスを着た女の子を連れてい

the standards of behavior we expect from Hogwarts students. I will be most seriously displeased if a Gryffindor student embarrasses the school in any way.”

The bell rang, and there was the usual scuffle of activity as everyone packed their bags and swung them onto their shoulders.

Professor McGonagall called above the noise, “Potter — a word, if you please.”

Assuming this had something to do with his headless rubber haddock, Harry proceeded gloomily to the teacher’s desk. Professor McGonagall waited until the rest of the class had gone, and then said, “Potter, the champions and their partners —”

“What partners?” said Harry.

Professor McGonagall looked suspiciously at him, as though she thought he was trying to be funny.

“Your partners for the Yule Ball, Potter,” she said coldly. “Your *dance partners*.”

Harry’s insides seemed to curl up and shrivel.

“Dance partners?” He felt himself going red. “I don’t dance,” he said quickly.

“Oh yes, you do,” said Professor McGonagall irritably. “That’s what I’m telling you. Traditionally, the champions and their partners open the ball.”

る。

「僕、ダンスするつもりはありません」ハリーが言った。

「伝統です」マクゴナガル先生がきっぱり言った。

「あなたはhogwartsの代表選手なのですから、

学校代表として、しなければならないことをするのです。

ポッター、必ずパートナーを連れてきなさい」

「でも、僕には」

「わかりましたね、ポッター」

マクゴナガル先生は、問答無用という口調で言った。

一週間前だったら、ハンガリー ホーンテールに立ち向かうことに比べれば、ダンスのパートナーを見つけることなんかお安い御用だと思ったことだろう。

しかし、ホーンテールが片づいたいま、女の子をダンスパーティに誘うという課題をぶつけられると、もう一度ホーンテールと戦うほうがまだましだとハリーは思った。

クリスマスにhogwartsに残る希望者リストに、こんなに大勢の名前が書き込まれるのを、ハリーははじめて見た。もちろんハリーはいままでも必ず名前を書いていた。そうでなければプリベット通りに帰るしかなかったからだ。

しかし、これまではハリーはいつも少数派だった。

ところが今年は、四年生以上は全員残るようだった。

しかも、全員がダンスパーティのことで頭がいっぱいのように見えた。

少なくとも女子学生は全員そうだった。

hogwartsにこんなにたくさんの女子学生がいるなんて、ハリーはいままでまったく気づかなかった。

廊下でクスクス笑ったり、ヒソヒソ囁いた

Harry had a sudden mental image of himself in a top hat and tails, accompanied by a girl in the sort of frilly dress Aunt Petunia always wore to Uncle Vernon's work parties.

"I'm not dancing," he said.

"It is traditional," said Professor McGonagall firmly. "You are a Hogwarts champion, and you will do what is expected of you as a representative of the school. So make sure you get yourself a partner, Potter."

"But — I don't —"

"You heard me, Potter," said Professor McGonagall in a very final sort of way.

A week ago, Harry would have said finding a partner for a dance would be a cinch compared to taking on a Hungarian Horntail. But now that he had done the latter, and was facing the prospect of asking a girl to the ball, he thought he'd rather have another round with the dragon.

Harry had never known so many people to put their names down to stay at Hogwarts for Christmas; he always did, of course, because the alternative was usually going back to Privet Drive, but he had always been very much in the minority before now. This year, however, everyone in the fourth year and above seemed to be staying, and they all seemed to Harry to be obsessed with the coming ball — or at least all the girls were, and it was amazing how many

り、男子学生がそばを通り過ぎるとキャアキャア笑い声をあげたり、クリスマスの夜に何を着ていくかを夢中で情報交換していたり……。

「どうしてみんな、塊って動かなきゃならないんだ？」

十二、三人の女子学生がクスクス笑いながらハリーを見つめて通り過ぎたとき、ハリーがロンに問いかけた。

「一人でいるところを捕らえて申し込むなんて、どうやったらいいんだろう？」

「投げ縄はどうだ？」ロンが提案した。

「だれか狙いたい子がいるかい？」

ハリーは答えなかった。だれを誘いたいかは自分でよくわかっていたが、その勇気があるかどうかは別問題だ……

チョウはハリーより一年上だ。とてもかわいい。

クィディッチのいい選手だ。しかも、とても人気がある。

ロンにはハリーの頭の中で起きていることがわかっているようだった。

「いいか。君は苦労しない。代表選手じゃないか。

ハンガリー ホーンテールもやっつけたばかりだ。

みんな行列して君と行きたがるよ」

最近回復したばかりの友情の証に、ロンはできるだけ嫌味に聞こえないような声でそう言った。

しかも、ハリーが驚いたことに、ロンの言うとおりの展開になった。

早速その翌日、ハッフルパフ寮の三年生で、巻き毛の女の子が、ハリーがこれまでも一度も口をきいたこともないのに、パーティに一緒に行かないかと誘ってきた。

ハリーはびっくり仰天し、考える間もなく「ノー」と言っていた。

女の子はかなり傷ついた様子で立ち去った。そのあとの「魔法史」の授業中ずっ

girls Hogwarts suddenly seemed to hold; he had never quite noticed that before. Girls giggling and whispering in the corridors, girls shrieking with laughter as boys passed them, girls excitedly comparing notes on what they were going to wear on Christmas night. ...

“Why do they have to move in packs?” Harry asked Ron as a dozen or so girls walked past them, sniggering and staring at Harry. “How’re you supposed to get one on their own to ask them?”

“Lasso one?” Ron suggested. “Got any idea who you’re going to try?”

Harry didn’t answer. He knew perfectly well whom he’d *like* to ask, but working up the nerve was something else. ... Cho was a year older than he was; she was very pretty; she was a very good Quidditch player, and she was also very popular.

Ron seemed to know what was going on inside Harry’s head.

“Listen, you’re not going to have any trouble. You’re a champion. You’ve just beaten a Hungarian Horntail. I bet they’ll be queuing up to go with you.”

In tribute to their recently repaired friendship, Ron had kept the bitterness in his voice to a bare minimum. Moreover, to Harry’s amazement, he turned out to be quite right.

A curly-haired third-year Hufflepuff girl to

と、ハリーは、ディーン、シューマス、ロンの冷やかに堪える羽目になった。

次の日、また二人の女の子が誘ってきた。二年生の子と、なんと（恐ろしいことに）五年生の女の子で、五年生は、ハリーが断ったらノックアウトをかましそうな様子だった。

「ルックスはなかなかだったじゃないか」さんざん笑ったあと、ロンが公正な意見を述べた。

「僕より三十センチも背が高かった」ハリーはまだショックが収まらなかった。「考えてもみて。僕があの人と踊ろうとしたらどんなふうに見えるか」

ハーマイオニーがクラムについて言った言葉が、しきりに思い出された。

「みんな、あの人が有名だからチャホヤしてるだけよ！」

パートナーになりたいと、これまで申し込んできた女の子たちは、自分が代表選手でなかったらはたして一緒にパーティに行きたいと思ったかどうか疑わしいとハリーは思った。誰なら僕と行きたいって思ってくれるんだろ。

しかし、申し込んだのがチョウだったら、自分はそんなことを気にするだろうか、とも思った。

ダンスパーティで最初に踊るという、なんともバツの悪いことが待ち受けてはいたが、全体的に見れば、第一の課題を突破して以来、状況がぐんと改善した。

ハリーもそれは認めざるをえなかった。

廊下でのいやがらせも、以前ほどひどくはなくなった。

セドリックのお陰が大きいのではないかとハリーは思った。

ハリーがドラゴンのことをこっそりセドリックに教えたお返しに、セドリックがハッフルパフ生に、ハリーをかまうな、と言ったのではないかと考えたのだ。

whom Harry had never spoken in his life asked him to go to the ball with her the very next day. Harry was so taken aback he said no before he'd even stopped to consider the matter. The girl walked off looking rather hurt, and Harry had to endure Dean's, Seamus's, and Ron's taunts about her all through History of Magic. The following day, two more girls asked him, a second year and (to his horror) a fifth year who looked as though she might knock him out if he refused.

“She was quite good-looking,” said Ron fairly, after he'd stopped laughing.

“She was a foot taller than me,” said Harry, still unnerved. “Imagine what I'd look like trying to dance with her.”

Hermione's words about Krum kept coming back to him. “They only like him because he's famous!” Harry doubted very much if any of the girls who had asked to be his partner so far would have wanted to go to the ball with him if he hadn't been a school champion. Then he wondered if this would bother him if Cho asked him.

On the whole, Harry had to admit that even with the embarrassing prospect of opening the ball before him, life had definitely improved since he had got through the first task. He wasn't attracting nearly as much unpleasantness in the corridors anymore, which he suspected had a lot to do with Cedric — he had an idea Cedric might

「セドリック ディゴリーを応援しよう」  
バッジもあまり見かけなくなった。

もちろん、ドラコ マルフォイは、相変わらず、

事あるごとにリータ スキーターの記事を持ち出していたが、それを笑う生徒もだんだん少なくなってきた声その上、

「日刊予言者新聞」にハグリッドの記事がまったく出ないのも、ハリーの幸せ気分をいっそう高めていた。

「正直言うとあの女は、あんまり魔法生物に関心があるように見えなかったな」

学期最後の「魔法生物飼育学」のクラスで、ハリー、ロン、ハーマイオニーが、リータ スキーターのインタビューはどうだったと聞くと、ハグリッドがそう答えた。

いまやハグリッドはスクリュートと直接触れ合うことを諦めていたので、みんなホッとしていた。

今日の授業は、ハグリッドの丸太小屋の陰に隠れ、簡易テーブルの周りに腰かけ、スクリュートが好みそうな新手の餌を用意するだけだった。

「あの女はな、ハリー、俺におまえさんのことばかり話させようとした」

ハグリッドが低い声で話し続けた。

「まあ、俺は、おまえさんとはダーズリーのところから連れ出してからずっと友達だって話した。

『四年間で一度も叱ったことはないの?』  
って聞いてな。

『授業中にあなたをイライラさせたりしなかった?』ってな。

俺が『ねえ』って言ってやったら、あの女、気に入らねえようだったな。

おまえさんのことをな、ハリー、とんでもねえヤツだって、俺にそう言わせたかったみてえだ」

「そのとおりさ」

have told the Hufflepuffs to leave Harry alone, in gratitude for Harry's tip-off about the dragons. There seemed to be fewer *Support Cedric Diggory!* badges around too. Draco Malfoy, of course, was still quoting Rita Skeeter's article to him at every possible opportunity, but he was getting fewer and fewer laughs out of it — and just to heighten Harry's feeling of well-being, no story about Hagrid had appeared in the *Daily Prophet*.

“She didn’ seem very int’rested in magical creatures, ter tell yeh the truth,” Hagrid said, when Harry, Ron, and Hermione asked him how his interview with Rita Skeeter had gone during the last Care of Magical Creatures lesson of the term. To their very great relief, Hagrid had given up on direct contact with the skrewts now, and they were merely sheltering behind his cabin today, sitting at a trestle table and preparing a fresh selection of food with which to tempt the skrewts.

“She jus’ wanted me ter talk about you, Harry,” Hagrid continued in a low voice. “Well, I told her we’d been friends since I went ter fetch yeh from the Dursleys. ‘Never had to tell him off in four years?’ she said. ‘Never played you up in lessons, has he?’ I told her no, an’ she didn’ seem happy at all. Yeh’d think she wanted me to say yeh were horrible, Harry.”

“ ‘Course she did,” said Harry, throwing lumps of dragon liver into a large metal bowl and picking up his knife to cut some more. “She

ハリーはそう言いながら、大きな金属ボールにドラゴンのレバーを切った塊をいくつか投げ入れ、もう少し切ろうとナイフを取り上げた。

「いつまでも僕のことを、小さな悲劇のヒーロー扱いで書いてるわけにいかないもの。それじゃ、つまんなくなってくるし」

「あいつ、新しい切り口がほしいのさ、ハグリッド」

火トカゲの卵の殻をむきながら、ロンがわかったような口をきいた。

「ハグリッドは、『ハリーは狂った非行少年です』って言わなきゃいけなかったんだ」

「ハリーがそんなわけねえだろう！」

ハグリッドはまともにショックを受けたような顔をした。

「あの人、スネイプをインタビューすればよかったんだ」ハリーが不快そうに言った。

「スネイプなら、いつでも僕に関するおいしい情報を提供するだろうに。」

『本校に来て以来、ポッターはずっと規則破りを続けておる……』とかね」

「そんなこと、スネイプが言ったのか？」

ロンとハーマイオニーは笑っていたが、ハグリッドは驚いていた。

「そりゃ、ハリー、おまえさんは規則の二つ、三つ曲げたかもしれんが、それでも、おまえさんはまともだろうが、え？」

「ありがとう、ハグリッド」ハリーがニコリした。

「クリスマスに、あのダンスなんとかっていうやつに来るの？ ハグリッド？」ロンが聞いた。

「ちょっと覗いてみるかと思っちょる。ウン」ハグリッドがぶっきらぼうに言った。

「ええパーティのはずだぞ……」

おまえさん、最初に踊るんだろうが！ え？ ハリー？ だれを誘うんだ？」

can't keep writing about what a tragic little hero I am, it'll get boring.”

“She wants a new angle, Hagrid,” said Ron wisely as he shelled salamander eggs. “You were supposed to say Harry’s a mad delinquent!”

“But he’s not!” said Hagrid, looking genuinely shocked.

“She should’ve interviewed Snape,” said Harry grimly. “He’d give her the goods on me any day. *‘Potter has been crossing lines ever since he first arrived at this school. ...’*”

“Said that, did he?” said Hagrid, while Ron and Hermione laughed. “Well, yeh might’ve bent a few rules, Harry, bu’ yeh’re all righ’ really, aren’ you?”

“Cheers, Hagrid,” said Harry, grinning.

“You coming to this ball thing on Christmas Day, Hagrid?” said Ron.

“Though’ I might look in on it, yeah,” said Hagrid gruffly. “Should be a good do, I reckon. You’ll be openin’ the dancin’, won’ yeh, Harry? Who’re you takin’?”

“No one, yet,” said Harry, feeling himself going red again. Hagrid didn’t pursue the subject.

The last week of term became increasingly boisterous as it progressed. Rumors about the Yule Ball were flying everywhere, though Harry didn’t believe half of them — for instance, that



「まだ、だれも」

ハリーは、また顔が赤くなるのを感じた。  
ハグリッドはそれ以上追及しなかった。  
学期最後の週は、日を追って騒がしくなった。

クリスマス ダンスパーティの噂が周り中に飛び交っていたが、ハリーはその半分は眉唾だと思った。

たとえば、ダンブルドアがマダム ロスメルタから蜂蜜酒を八百樽買い込んだとかだ。

ただ、ダンブルドアが「妖女シスターズ」の出演を予約したというのはほんとうらしかった。

「妖女シスターズ」がいったいだれで、何をするのか、魔法ラジオを聴く機会がなかったハリーは、はっきりとは知らなかったが、WWN魔法ラジオネットワークを聴いて育ったほかの生徒たちの異常な興奮振りからすると、きっととても有名なバンドなのだろうと思った。

何人かの先生方は、チビのフリットウィック先生もその一人だったが、生徒がまったく上の空なので、しっかり教え込むのは無理だと諦めてしまった。

フリットウィック先生は水曜の授業で、生徒にゲームをして遊んでよいと言い、自分はほとんどずっと、対抗試合の第一の課題でハリーが使った完璧な「呼び寄せ呪文」についてハリーと話し込んだ。

ほかの先生は、そこまで甘くはなかった。  
たとえばピンズ先生だが、天地が引っくり返っても、この先生は「ゴブリンの反乱」のノートを延々と読み上げるだろう。

自分が死んでも授業を続ける妨げにならなかったピンズ先生のことだ。

たかがクリスマスごときでおたおたするタマではないと、みんなそう思った。

血生臭い、凄惨なゴブリンの反乱でさえ、ピンズ先生の手にかかれば、パーシーの「鍋底に関する報告書」と同じように退屈

Dumbledore had bought eight hundred barrels of mulled mead from Madam Rosmerta. It seemed to be fact, however, that he had booked the Weird Sisters. Exactly who or what the Weird Sisters were Harry didn't know, never having had access to a wizard's wireless, but he deduced from the wild excitement of those who had grown up listening to the WWN (Wizarding Wireless Network) that they were a very famous musical group.

Some of the teachers, like little Professor Flitwick, gave up trying to teach them much when their minds were so clearly elsewhere; he allowed them to play games in his lesson on Wednesday, and spent most of it talking to Harry about the perfect Summoning Charm Harry had used during the first task of the Triwizard Tournament. Other teachers were not so generous. Nothing would ever deflect Professor Binns, for example, from plowing on through his notes on goblin rebellions — as Binns hadn't let his own death stand in the way of continuing to teach, they supposed a small thing like Christmas wasn't going to put him off. It was amazing how he could make even bloody and vicious goblin riots sound as boring as Percy's cauldron-bottom report. Professors McGonagall and Moody kept them working until the very last second of their classes too, and Snape, of course, would no sooner let them play games in class than adopt Harry. Staring nastily around at them all, he informed them that he would be testing them on poison antidotes during the last lesson of the

なものになってしまうのは驚くべきことだった。

マクゴナガル先生、ムーディ先生の二人は、最後の一秒まできっちり授業を続けたし、スネイプももちろん、クラスで生徒にゲームをして遊ばせるくらいなら、むしろハリーを養子にしたらどう。

生徒全員を意地悪くジロリと見渡ししながら、スネイプは、学期最後の授業で解毒剤のテストをすると言い渡した。

「悪だよ、あいつ」

その夜、グリフィンドールの談話室で、ロンが苦々しげに言った。

「急に最後の授業にテストを持ち出すなんて。山ほど勉強させて、学期末を台無しにする気だ」

「うーん……でも、あなた、あんまり山ほど勉強しているように見えないけど？」

ハーマイオニーは「魔法薬学」のノートから顔を上げて、ロンを見た。

ロンは「爆発スナップ」ゲームのカードを積んで城を作るのに夢中だった。

カードの城がいつなんどきいっぺんに爆発するかわからないので、マグルのカードを使う遊びよりずっとおもしろい。

「クリスマスじゃないか、ハーマイオニー」ハリーが気だるそうに言った。

暖炉のそばで、肘掛椅子に座り、「キャノンズと飛ばう」をもうこれで十回も読んでいるところだった。

ハーマイオニーはハリーにも厳しい目を向けた。

「解毒剤のほうはもう勉強したくないにしても、ハリー、あなた、何か建設的なことをやるべきじゃないの！」

「たとえば？」

ちょうどキャノンズのジョーイ ジエンキンズが、バリキャッスル バッツのチェイサーにブラッジャーを打ち込む場面を眺めながら、ハリーが聞いた。

term.

“Evil, he is,” Ron said bitterly that night in the Gryffindor common room. “Springing a test on us on the last day. Ruining the last bit of term with a whole load of studying.”

“Mmm ... you’re not exactly straining yourself, though, are you?” said Hermione, looking at him over the top of her Potions notes. Ron was busy building a card castle out of his Exploding Snap pack — a much more interesting pastime than with Muggle cards, because of the chance that the whole thing would blow up at any second.

“It’s Christmas, Hermione,” said Harry lazily; he was rereading *Flying with the Cannons* for the tenth time in an armchair near the fire.

Hermione looked severely over at him too. “I’d have thought you’d be doing something constructive, Harry, even if you don’t want to learn your antidotes!”

“Like what?” Harry said as he watched Joey Jenkins of the Cannons belt a Bludger toward a Ballycastle Bats Chaser.

“That egg!” Hermione hissed.

“Come on, Hermione, I’ve got till February the twenty-fourth,” Harry said.

He had put the golden egg upstairs in his trunk and hadn’t opened it since the celebration party after the first task. There were still two and

「あの卵よ！」ハーマイオニーが歯を食いしばりながら言った。

「そんなあ。ハーマイオニー、二月二十四日までまだ日があるよ」ハリーが言った。金の卵は上階の寝室のトランクにしまい込んであり、ハリーは最初の課題のあとのお祝いパーティ以来一度も開けていなかった。

あのけたたましい咽び泣きのような音が何を意味するのかを解明するのに、とにかくまだ二ヵ月半もあるのだ。

「でも、解明するのに何週間もかかるかもしれないわ！」ハーマイオニーが言った。

「ほかの人が全部次の課題を知っているのに、あなただけ知らなかったら、まぬけ面もいいとこでしょ！」

「ほっといてやれよ、ハーマイオニー。休息してもいいだけのものを勝ち取ったんだ」

ロンはそう言いながら、最後の二枚のカードを城のてっぺんに置いた。

とたんに全部が爆発して、ロンの眉毛が焦げた。

「男前になったぞ、ロン……おまえのドレスローブにぴったりだ。きっと」

フレッドとジョージだった。

ロンが眉の焦げ具合を触って調べていると、二人はテーブルに来て、ロン、ハーマイオニーと一緒に座った。

「ロン、ピッグウィジョンを借りてもいいか？」ジョージが聞いた。

「だめ。いま手紙の配達に出てる」ロンが言った。「でも、どうして？」

「ジョージがピッグをダンスパーティに誘いたいからさ」フレッドが皮肉った。

「俺たちが手紙を出したいからにきまってるだろ。バカチン」ジョージが言った。

「二人でそんなに次々と、だれに手紙を出してるんだ、ん？」ロンが聞いた。

「嘴を突っ込むな。さもないとそれも焦が

a half months to go until he needed to know what all the screechy wailing meant, after all.

“But it might take weeks to work it out!” said Hermione. “You’re going to look a real idiot if everyone else knows what the next task is and you don’t!”

“Leave him alone, Hermione, he’s earned a bit of a break,” said Ron, and he placed the last two cards on top of the castle and the whole lot blew up, singeing his eyebrows.

“Nice look, Ron ... go well with your dress robes, that will.”

It was Fred and George. They sat down at the table with Harry, Ron, and Hermione as Ron felt how much damage had been done.

“Ron, can we borrow Pigwidgeon?” George asked.

“No, he’s off delivering a letter,” said Ron. “Why?”

“Because George wants to invite him to the ball,” said Fred sarcastically.

“Because *we* want to send a letter, you stupid great prat,” said George.

“Who d’you two keep writing to, eh?” said Ron.

“Nose out, Ron, or I’ll burn that for you too,” said Fred, waving his wand threateningly. “So ... you lot got dates for the ball yet?”

してやるぞ」

フレッドが脅すように杖を振った。

「で……みんな、ダンスパーティの相手を見つけたか？」

「まーだ」ロンが言った。

「なら、急げよ、兄弟。さもないと、いいのは全部取られちゃうぞ」フレッドが言った。

「それじゃ、兄貴はだれと行くんだ？」ロンが聞いた。

「アンジェリーナ」フレッドはまったく照れもせず、すぐに答えた。

「え？」ロンは面食らった。「もう申し込んだの？」「いい質問だ」

そう言いながら、やおら後ろを振り向き、フレッドは談話室のむこうに声をかけた。

「おーい！ アンジェリーナ！」

暖炉のそばでアリシア スピネットとしゃべっていたアンジェリーナが、フレッドのほうを振り向いた。

「なに？」声が返ってきた。

「俺とダンスパーティに行くかい？」

アンジェリーナは品定めするようにフレッドを見た。

「いいわよ」

アンジェリーナはそう言うと、またアリシアのほうを向いておしゃべりを続けた。

口元が微かに笑っていた。

「こんなもんだ」フレッドがハリーとロンに言った。「かーんたん」

フレッドは欠伸をしながら立ち上がった。

「学校のふくろうを使ったほうがよさそうだな、ジョージ、行こうか……」

二人がいなくなった。ロンは眉を触るのをやめ、燦っているカードの城の残骸のむこう側からハリーを見た。

「僕たち、行動開始すべきだぞ……だれかに申し込もう。フレッドの言うとおりで。残るはトロール二匹、じゃ困るぞ」

“Nope,” said Ron.

“Well, you’d better hurry up, mate, or all the good ones will be gone,” said Fred.

“Who’re you going with, then?” said Ron.

“Angelina,” said Fred promptly, without a trace of embarrassment.

“What?” said Ron, taken aback. “You’ve already asked her?”

“Good point,” said Fred. He turned his head and called across the common room, “Oi! Angelina!”

Angelina, who had been chatting with Alicia Spinnet near the fire, looked over at him.

“What?” she called back.

“Want to come to the ball with me?”

Angelina gave Fred an appraising sort of look.

“All right, then,” she said, and she turned back to Alicia and carried on chatting with a bit of a grin on her face.

“There you go,” said Fred to Harry and Ron, “piece of cake.”

He got to his feet, yawning, and said, “We’d better use a school owl then, George, come on. ...”

They left. Ron stopped feeling his eyebrows and looked across the smoldering wreck of his

ハーマイオニーは癪に障ったように聞き返した。

「ちょっとお伺いしますけど、二匹の……なんですって？」

「あのさ、ほら」ロンが肩をすくめた。

「一人で行くほうがましだろ？ たとえば、エロイーズ ミジョンと行くくらいなら」

「あの子のにきび、このごろずっとよくなったわ。それにとってもいい子だわ！」

「鼻が真ん中からズレてる」ロンが言った。

「ええ、わかりましたよ」

ハーマイオニーがチクチク言った。

「それじゃ、基本的に、あなたは、お顔のいい順に申し込んで、最初にオーケーしてくれる子と行くわけね。メチャメチャいやな子でも？」

「あ、ウン。そんなとこだ」ロンが言った。

「私、もう寝るわ」

ピシャリと言うと、ハーマイオニーは、口もきかずに、さっと女子寮への階段に消えた。

ホグワーツの教職員は、ボーバトンとダームストラングの客人を、引き続きあつと言わせたいとの願いを込め、クリスマスには城を最高の状態で見せようと決意したようだった。

飾りつけができ上がると、それは、ハリーがこれまでホグワーツ城で見た中でも最高にすばらしいものだった。

大理石の階段の手すりには万年氷の氷柱が下がっていたし、十二本のクリスマスツリーがいつものように大広間に並び、飾りは赤く輝くヒイラギの実から、本物のホーホー鳴く金色のふくろうまで、盛りだくさんだった。

鎧兜には全部魔法がかけられ、だれかがそばを通るたびにクリスマス キャロルを歌った。

card castle at Harry.

“We *should* get a move on, you know ... ask someone. He’s right. We don’t want to end up with a pair of trolls.”

Hermione let out a sputter of indignation.

“A pair of ... *what*, excuse me?”

“Well — you know,” said Ron, shrugging. “I’d rather go alone than with — with Eloise Midgen, say.”

“Her acne’s loads better lately — and she’s really nice!”

“Her nose is off-center,” said Ron.

“Oh I see,” Hermione said, bristling. “So basically, you’re going to take the best-looking girl who’ll have you, even if she’s completely horrible?”

“Er — yeah, that sounds about right,” said Ron.

“I’m going to bed,” Hermione snapped, and she swept off toward the girls’ staircase without another word.

The Hogwarts staff, demonstrating a continued desire to impress the visitors from Beauxbatons and Durmstrang, seemed determined to show the castle at its best this Christmas. When the decorations went up, Harry noticed that they were the most stunning he had

中が空っぽの兜が、歌詞を半分しか知らないのに、「 神の御子は今宵しも」と歌うのは、なかなかのものだった。

ピープズは鎧に隠れるのが気に入り、抜けた歌詞のところで勝手に自分で作った合いの手を入れ、それが全部下品な歌詞だったので、管理人のフィルチは、鎧の中から何度もピープズを引きずり出さなければならなかった。

それなのに、ハリーはまだチョウにダンスパーティの申し込みをしていなかった。

ハリーもロンも、いまやだいぶ心配になってきた。

しかし、ハリーは、ロンの場合、相手がいなくてもハリーほどまぬけには見えないだろうと指摘した。

ハリーの場合は、なにしろほかの代表選手と一緒に、最初のダンスをしなければならないのだ。

「いざとなれば『嘆きのマートル』がいるさ」

ハリーは憂鬱な気持で、三階の女子トイレに取り憑いているゴーストのことを口にした。

「ハリー、われわれは齒を食いしばって、やらねばならぬ」

金曜の朝に難攻不落の砦に攻め入る計画を練っているかのように、ロンが言った。

「今夜、談話室に戻るときには、われわれは二人ともパートナーを獲得している、いいな？」

「あー……オッケー」ハリーが言った。

しかしその日、チョウを見かけるたび、休憩時間や昼食時間、一度は「魔法史」に行く途中、チョウは友達に囲まれていた。

いったいぜんたい、一人でどこかに行くことはあるのか？

トイレに入る直前を待ち伏せしてはどうか？

いや、しかし、そこへ行くときさえ、チョ

yet seen inside the school. Everlasting icicles had been attached to the banisters of the marble staircase; the usual twelve Christmas trees in the Great Hall were bedecked with everything from luminous holly berries to real, hooting, golden owls, and the suits of armor had all been bewitched to sing carols whenever anyone passed them. It was quite something to hear “O Come, All Ye Faithful” sung by an empty helmet that only knew half the words. Several times, Filch the caretaker had to extract Peeves from inside the armor, where he had taken to hiding, filling in the gaps in the songs with lyrics of his own invention, all of which were very rude.

And still, Harry hadn’t asked Cho to the ball. He and Ron were getting very nervous now, though as Harry pointed out, Ron would look much less stupid than he would without a partner; Harry was supposed to be starting the dancing with the other champions.

“I suppose there’s always Moaning Myrtle,” he said gloomily, referring to the ghost who haunted the girls’ toilets on the second floor.

“Harry — we’ve just got to grit our teeth and do it,” said Ron on Friday morning, in a tone that suggested they were planning the storming of an impregnable fortress. “When we get back to the common room tonight, we’ll both have partners — agreed?”

“Er ... okay,” said Harry.

But every time he glimpsed Cho that day —

ウは四、五人の女の子と連れ立っていた。  
それでも、ハリーがすぐに申し込まないと、チョウはきっとだれかに申し込まれてしまう。

ハリーは、スネイプの解毒剤のテストに身が入らなかった。

その結果、大事な材料をいつ加えるのを忘れた。ベゾアール石、山羊の結石、これで点数は最低だった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。  
これからやろうとしていることに、勇気を振り絞るのに精一杯だった。

ベルが鳴ったとき、ハリーはカバンを引っつかみ、地下牢教室の出口へと突進した。

「夕食のとき会おう」

ハリーはロンとハーマイオニーにそう言う  
と、階段を駆け上った。

チョウに、二人だけで少し話したいと言  
うしかない……ハリーはチョウを探しなが  
ら、混み合った廊下を急いで通り抜けた。  
そして、（思ったより早く）チョウを見つ  
けた。

「闇の魔術に対する防衛術」のクラスから  
出てくるところだった。

「あの、チョウ？ ちょっと二人だけで話せ  
る？」

チョウと一緒に女の子たちがクスクス笑い  
はじめた…ハリーは腹が立って、クスクス  
笑いは法律で禁じるべきだと思った。しか  
し、チョウは笑わなかった。

「いいわよ」と言って、クラスメイトに声  
が聞こえないところまで、ハリーについて  
きた。

ハリーはチョウのほうに向き直った。

まるで階段を下りるとき一段踏み外したよ  
うに、胃が奇妙に揺れた。

「あの」ハリーが言った。

だめだ。チョウに申し込むなんてできな  
い。でもやらなければ。

チョウは、そこに立ったまま「何かし

during break, and then lunchtime, and once on  
the way to History of Magic — she was  
surrounded by friends. Didn't she *ever* go  
anywhere alone? Could he perhaps ambush her  
as she was going into a bathroom? But no — she  
even seemed to go there with an escort of four or  
five girls. Yet if he didn't do it soon, she was  
bound to have been asked by somebody else.

He found it hard to concentrate on Snape's  
Potions test, and consequently forgot to add the  
key ingredient — a bezoar — meaning that he  
received bottom marks. He didn't care, though;  
he was too busy screwing up his courage for  
what he was about to do. When the bell rang, he  
grabbed his bag, and hurried to the dungeon  
door.

"I'll meet you at dinner," he said to Ron and  
Hermione, and he dashed off upstairs.

He'd just have to ask Cho for a private word,  
that was all. ... He hurried off through the  
packed corridors looking for her, and (rather  
sooner than he had expected) he found her,  
emerging from a Defense Against the Dark Arts  
lesson.

"Er — Cho? Could I have a word with you?"

Giggling should be made illegal, Harry  
thought furiously, as all the girls around Cho  
started doing it. She didn't, though. She said,  
"Okay," and followed him out of earshot of her  
classmates.

ら？」という顔でハリーを見ていた。  
舌がまだ十分整わないうちに、言葉が出てしまった。

「ぼくダンパティいたい？」

「え？」チョウが聞き返した。

「よかったら、よかったら、僕とダンスパーティーに行かない？」

ハリーは言った。どうしていま、僕は赤くならなきゃならないんだ？ どうして？

「まあ！」チョウも赤くなった。「まあ、ハリー。ほんとうに、ごめんなさい」

チョウはほんとうに残念そうな顔をした。

「もう、ほかの人と行くって言ってしまったの」

「そう」ハリーが言った。

変な気持ちだ。

いまのいままで、ハリーの内臓は蛇のようにのたうっていたのに、急に腹の中が空っぽになったような気がした。

「そう。オッケー」ハリーは言った。「それならいいんだ」

「ほんとうに、ごめんなさい」チョウがまた謝った。

「いいんだ」

二人は見つめ合ったままそこに立っていた。やがて、チョウが言った。

「それじゃ」

「ああ」ハリーが言った。

「それじゃ、さよなら」チョウは、まだ顔を赤らめたままそう言うと歩きはじめた。ハリーは、思わず後ろからチョウを呼び止めた。

「だれと行くの？」

「あの、セドリック」チョウが答えた。

「セドリック ディゴリーよ」

「わかった」ハリーが言った。

ハリーの内臓が戻ってきた。

いなくなっていた間に、どこかで鉛でも詰

Harry turned to look at her and his stomach gave a weird lurch as though he had missed a step going downstairs.

“Er,” he said.

He couldn’t ask her. He couldn’t. But he had to. Cho stood there looking puzzled, watching him.

The words came out before Harry had quite got his tongue around them.

“Wangoballwime?”

“Sorry?” said Cho.

“D’you — d’you want to go to the ball with me?” said Harry. Why did he have to go red now? *Why?*

“Oh!” said Cho, and she went red too. “Oh Harry, I’m really sorry,” and she truly looked it. “I’ve already said I’ll go with someone else.”

“Oh,” said Harry.

It was odd; a moment before his insides had been writhing like snakes, but suddenly he didn’t seem to have any insides at all.

“Oh okay,” he said, “no problem.”

“I’m really sorry,” she said again.

“That’s okay,” said Harry.

They stood there looking at each other, and then Cho said, “Well —”



め込んできたような感じだ。

夕食のことなどすっかり忘れて、ハリーはグリフィンボール塔にノロノロと戻っていた。

一歩歩くごとに、チョウの声が耳の中で木霊した。

「セドリック、セドリック デイゴリーよ」

ハリーはセドリックが好きになりかけていた。

一度クィディッチでハリーを破ったことも、ハンサムなことも、人気があることも、ほとんど全校生が代表選手としてセドリックを応援していることも、大目に見ようと思いはじめていた。

いま、突然、ハリーは気づいた。

セドリックは、役にも立たない、かわいいだけの、頭は鳥の脳みそぐらいしかないやつだ。

「フェアリーライト、豆電球」

ハリーはノロノロと言った。合言葉は昨日から変わっていた。

「そのとおりよ、坊や！」

「太った婦人」は歌うように言いながら、真新しいティンセルのヘアバンドをきちんと直し、パッと開いてハリーを通した。

談話室に入り、ハリーはグルリと見回した。

驚いたことに、ロンが隅っこで、血の気のない顔をして座り込んでいた。

ジニーがそばに座って、低い声で、慰めるように話しかけていた。

「ロン、どうした？」ハリーは二人のそばに行った。

ロンは、恐怖の表情で呆然とハリーを見上げた。

「僕、どうしてあんなことやっちゃったんだろう？」ロンは興奮していた。

「どうしてあんなことをする気になったのか、わからない！」

“Yeah,” said Harry.

“Well, ’bye,” said Cho, still very red. She walked away.

Harry called after her, before he could stop himself.

“Who’re you going with?”

“Oh — Cedric,” she said. “Cedric Diggory.”

“Oh right,” said Harry.

His insides had come back again. It felt as though they had been filled with lead in their absence.

Completely forgetting about dinner, he walked slowly back up to Gryffindor Tower, Cho’s voice echoing in his ears with every step he took. “*Cedric — Cedric Diggory.*” He had been starting to quite like Cedric — prepared to overlook the fact that he had once beaten him at Quidditch, and was handsome, and popular, and nearly everyone’s favorite champion. Now he suddenly realized that Cedric was in fact a useless pretty boy who didn’t have enough brains to fill an eggcup.

“Fairy lights,” he said dully to the Fat Lady — the password had been changed the previous day.

“Yes, indeed, dear!” she trilled, straightening her new tinsel hair band as she swung forward to admit him.

「何を？」ハリーが聞いた。

「ロンは、あの、フラー デラクールに、一緒にダンスパーティに行こうって誘ったの」

ジニーが答えた。

つい口元が緩みそうになるのを必死でこらえているようだったが、それでも、ロンの腕を慰めるように撫でていた。

「なんだって？」ハリーが聞き返した。

「どうしてあんなことをしたのか、わかんないよ！」ロンがまた絶句した。

「いったいなにを考えてたんだろう？

たくさん人がいて、みんな周りにいて、僕、どうかしてたんだ、みんなが見てた！

僕、玄関ホールでフラーとすれ違ったんだ。

フラーはあそこに立って、ディゴリーと話してた。

そしたら、急に僕、取り憑かれたみたいになって、あの子に申し込んだんだ！」

ロンは叩き、両手に顔を埋めた。

言葉がよく聞き取れなかったが、ロンはしゃべり続けた。

「フラーはぼくのこと、ナマコかなにか見るような目で見たんだ。答えもしなかった。

そしたら、なんだか、僕、正気に戻って、逃げだした」

「あの子にはヴィーラの血が入ってるんだ」ハリーが言った。

「君の言ったことが当たってた。おばあさんがヴィーラだったんだ。君のせいじゃない。

きっと、フラーがディゴリーに魅力を振り撒いていたとき、君が通りかかったんだ。

そしてその魅力に当たったんだ。だけど、フラーは骨折り損だよ。ディゴリーはチョウ チャンと行く」

ロンが顔を上げた。

Entering the common room, Harry looked around, and to his surprise he saw Ron sitting ashen-faced in a distant corner. Ginny was sitting with him, talking to him in what seemed to be a low, soothing voice.

“What’s up, Ron?” said Harry, joining them.

Ron looked up at Harry, a sort of blind horror in his face.

“Why did I do it?” he said wildly. “I don’t know what made me do it!”

“What?” said Harry.

“He — er — just asked Fleur Delacour to go to the ball with him,” said Ginny. She looked as though she was fighting back a smile, but she kept patting Ron’s arm sympathetically.

“You *what*?” said Harry.

“I don’t know what made me do it!” Ron gasped again. “What was I playing at? There were people — all around — I’ve gone mad — everyone watching! I was just walking past her in the entrance hall — she was standing there talking to Diggory — and it sort of came over me — and I asked her!”

Ron moaned and put his face in his hands. He kept talking, though the words were barely distinguishable.

“She looked at me like I was a sea slug or something. Didn’t even answer. And then — I dunno — I just sort of came to my senses and

「たったいま、僕、チョウに申し込んだんだ」

ハリーは気が抜けたように言った。

「そしたら、チョウが教えてくれた」

ジニーが急に真顔になった。

「冗談じゃない」ロンが言った。

「相手がないのは、僕たちだけだ。」

まあ、ネビルは別として。あーネビルがだれに申し込んだと思う？ ハーマイオニーだ！」

「エーッ！」

衝撃のニュースで、ハリーはすっかりそちらに気を取られてしまった。

「そうなんだよ！」

ロンが笑いだし、顔に少し血の気が戻ってきた。

「『魔法薬学』のクラスのあとで、ネビルが話してくれたんだ！

あの人はいつもとってもやさしくて、僕の宿題とか手伝ってくれてって言うんだよ。

でもハーマイオニーはもうだれかと行くことになってるからとネビルに言ったんだって。

ヘン！ まさか！ ただネビルと行きたくなかっただけなんだ……だって、だれがあいつなんかと？」

「やめて！」 ジニーが当惑したように言った。

「笑うのはやめて」

ちょうどそのとき、ハーマイオニーが肖像画の穴を這い登ってきた。

「二人とも、どうして夕食に来なかったの？」

そう言いながら、ハーマイオニーも仲間に加わった。

「なぜって、ねえ、やめてよ、二人とも。笑うのは。」

なぜって、二人ともダンスパーティに誘った女の子に、断られたばかりだからよ！」

ran for it.”

“She’s part veela,” said Harry. “You were right — her grandmother was one. It wasn’t your fault, I bet you just walked past when she was turning on the old charm for Diggory and got a blast of it — but she was wasting her time. He’s going with Cho Chang.”

Ron looked up.

“I asked her to go with me just now,” Harry said dully, “and she told me.”

Ginny had suddenly stopped smiling.

“This is mad,” said Ron. “We’re the only ones left who haven’t got anyone — well, except Neville. Hey — guess who he asked? *Hermione!*”

“*What?*” said Harry, completely distracted by this startling news.

“Yeah, I know!” said Ron, some of the color coming back into his face as he started to laugh. “He told me after Potions! Said she’s always been really nice, helping him out with work and stuff — but she told him she was already going with someone. Ha! As if! She just didn’t want to go with Neville ... I mean, who would?”

“Don’t!” said Ginny, annoyed. “Don’t laugh —”

Just then Hermione climbed in through the portrait hole.

ジニーが言った。

その言葉でハリーもロンも笑うのをやめた。

「大いにありがとよ。ジニー」ロンがムッとしたように言った。

「かわいい子はみんな予約済みってわけ？ロン？」

ハーマイオニーがツンツンしながら言った。

「エロイーズ ミジョンが、いまはちょっとかわいく見えてきたでしょ？ ま、きつと、どこかには、お二人を受け入れてくれるだれかさんがいるでしょうよ」

しかし、ロンはハーマイオニーをマジマジと見ていた。

急にハーマイオニーが別人に見えたような目つきだ。

「ハーマイオニー、ネビルの言うとおりで。君は、れっきとした女の子だ……」

「まあ、よくお気づきになりましたこと」ハーマイオニーが辛辣に言った。

「そうだ、君が僕たち二人のどりらかと来ればいい！」

「お生憎様」ハーマイオニーがぴしゃりと言った。

「ねえ、そう言わずに」

ロンがもどかしそうに言った。

「僕たち、パートナーが必要なんだ。

ほかの子は全部いるのに、僕たちだけだれもいなかったら、ほんとにまぬけに見えるじゃないか……」

「私、一緒には行けないわ」

ハーマイオニーが今度は赤くなった。

「だって、もう、ほかの人と行くことになってるの」

「そんなはずないよ！」ロンが言った。

「そんなこと、ネビルを追い払うために言ったんだよ！」

「あら、そうかしら？」

“Why weren’t you two at dinner?” she said, coming over to join them.

“Because — oh shut up laughing, you two — because they’ve both just been turned down by girls they asked to the ball!” said Ginny.

That shut Harry and Ron up.

“Thanks a bunch, Ginny,” said Ron sourly.

“All the good-looking ones taken, Ron?” said Hermione loftily. “Eloise Midgen starting to look quite pretty now, is she? Well, I’m sure you’ll find someone *somewhere* who’ll have you.”

But Ron was staring at Hermione as though suddenly seeing her in a whole new light.

“Hermione, Neville’s right — you *are* a girl. ...”

“Oh well spotted,” she said acidly.

“Well — you can come with one of us!”

“No, I can’t,” snapped Hermione.

“Oh come on,” he said impatiently, “we need partners, we’re going to look really stupid if we haven’t got any, everyone else has ...”

“I can’t come with you,” said Hermione, now blushing, “because I’m already going with someone.”

“No, you’re not!” said Ron. “You just said that to get rid of Neville!”

ハーマイオニーの目が危険な輝きを放った。

「あなたは、三年もかかってやっとお気づきになられたようですけどね、ロン、だからと言って、ほかのだれも私が女の子だと気づかなかったわけじゃないわ！」

ロンはハーマイオニーをじっと見た。それからまたニヤッと笑った。

「オツケー、オツケー。僕たち、君が女の子だと認める」ロンが言った。

「これでいいだろ？ さあ、僕たちと行くかい？」

「だから、言ったでしょ！」ハーマイオニーが本気で怒った。「ほかの人と行くんです！」

そして、また、ハーマイオニーは女子寮のほうへ、さっさと行ってしまった。

「あいつ、嘘ついてる」ロンはその後ろ姿を見ながらきっぱりと言った。

「嘘じゃないわ」ジニーが静かに言った。

「じゃ、だれと？」ロンが声を尖らせた。

「言わないわ。あたし、関係ないもの」ジニーが言った。

「よーし」

ロンはかなりまいっているようだった。

「こんなこと、やってられないぜ。ジニー、おまえがハリーと行けばいい。僕はただ」

「あたし、だめなの」ジニーも真っ赤になった。

「あたし、あたし、ネビルと行くの。ハーマイオニーに断られたとき、あたしを誘ったの。」

あたし……そうね……誘いを受けないと、ダンスパーティには行けないと思ったの。

まだ四年生になっていないし」

ジニーはとても惨めそうだった。

「あたし、夕食を食べにいくわ」

そう言うと、ジニーは立ち上がって、うな

“Oh *did* I?” said Hermione, and her eyes flashed dangerously. “Just because it’s taken *you* three years to notice, Ron, doesn’t mean no one *else* has spotted I’m a girl!”

Ron stared at her. Then he grinned again.

“Okay, okay, we know you’re a girl,” he said. “That do? Will you come now?”

“I’ve already told you!” Hermione said very angrily. “I’m going with someone else!”

And she stormed off toward the girls’ dormitories again.

“She’s lying,” said Ron flatly, watching her go.

“She’s not,” said Ginny quietly.

“Who is it then?” said Ron sharply.

“I’m not telling you, it’s her business,” said Ginny.

“Right,” said Ron, who looked extremely put out, “this is getting stupid. Ginny, *you* can go with Harry, and I’ll just —”

“I can’t,” said Ginny, and she went scarlet too. “I’m going with — with Neville. He asked me when Hermione said no, and I thought ... well ... I’m not going to be able to go otherwise, I’m not in fourth year.” She looked extremely miserable. “I think I’ll go and have dinner,” she said, and she got up and walked off to the portrait hole, her head bowed.

だれたまま、肖像画の穴のほうに歩いていった。

ロンは目を丸くしてハリーのほうを見た。

「あいつら、どうなっちゃってんだ？」ロンがハリーに問いかけた。

しかし、ハリーのほうはちょうど肖像画の穴をくぐってきたパーバティとラベンダーを見つけたところだった。

思い切って行動を起こすなら、いまだ。

「ここで、待ってて」

ロンにそう言うと、ハリーは立ち上がってまっすぐにパーバティのところに行き、聞いた。

「パーバティ？ 僕とダンスパーティに行かない？」

パーバティはクスクス笑いの発作に襲われた。

ハリーは、ローブのポケットに手を突っ込み、うまくいくように指でおまじないをしながら笑いが収まるのを待った。

「ええ、いいわよ」

パーバティはやっとそう言うと、見る見る真っ赤になった。

「ありがとう」ハリーはホッとした。「ラベンダー、ロンと一緒に行かない？」

「ラベンダーはシューマスと行くの」

パーバティが言った。そして二人でますますクスクス笑いをした。

ハリーはため息をついた。

「だれか、ロンと行ってくれる人、知らない？」

ロンに聞こえないように声を落として、ハリーが聞いた。

「ハーマイオニー グレンジャーは？」パーバティが言った。

「ほかの人と行くんだって」

パーバティは驚いた顔をした。

「へえええっ……いったいだれ？」パーバティは興味津々だ。

Ron goggled at Harry.

“What’s got into them?” he demanded.

But Harry had just seen Parvati and Lavender come in through the portrait hole. The time had come for drastic action.

“Wait here,” he said to Ron, and he stood up, walked straight up to Parvati, and said, “Parvati? Will you go to the ball with me?”

Parvati went into a fit of giggles. Harry waited for them to subside, his fingers crossed in the pocket of his robes.

“Yes, all right then,” she said finally, blushing furiously.

“Thanks,” said Harry, in relief. “Lavender — will you go with Ron?”

“She’s going with Seamus,” said Parvati, and the pair of them giggled harder than ever.

Harry sighed.

“Can’t you think of anyone who’d go with Ron?” he said, lowering his voice so that Ron wouldn’t hear.

“What about Hermione Granger?” said Parvati.

“She’s going with someone else.”

Parvati looked astonished.

“Ooooh — *who?*” she said keenly.

<p>ハリーは肩をすぼめて言った。</p> <p>「全然知らない。それで、ロンのことは？」</p> <p>「そうね……」バーバティはちょっと考えた。</p> <p>「わたしの妹なら……パドマだけど……レイブンクローの。よかったら、聞いてみるけど」</p> <p>「うん。そうしてくれたら助かる。結果を知らせてくれる？」ハリーが言った。</p> <p>ハリーはロンのところに戻った。</p> <p>このダンスパーティは、それほどの価値もないのに、余計な心配ばかりさせられると思った。</p> <p>そして、パドマ パチルの鼻が、顔の真ん中についていますようにと、心から願った。</p>	<p>Harry shrugged. “No idea,” he said. “So what about Ron?”</p> <p>“Well …” said Parvati slowly, “I suppose my sister might ... Padma, you know ... in Ravenclaw. I’ll ask her if you like.”</p> <p>“Yeah, that would be great,” said Harry. “Let me know, will you?”</p> <p>And he went back over to Ron, feeling that this ball was a lot more trouble than it was worth, and hoping very much that Padma Patil’s nose was dead center.</p>
---	---